2005 年 10 月 27 日、エロイ・マルティン・コラーレス氏により「北アフリカ沿岸へのカタルーニャ人旅行者たち (19-20 世紀)」と題する研究報告がおこなわれた。コラーレス氏の今回の報告は近代ヨーロッパ植民地主義の問題をカタルーニャという視座から照射したものであるが、その試みは、二つの意味で貴重なものであると思われる。

ひとつには、これがヨーロッパのなかでも数少ないスペインからの証言であるということである。サイードは『オリエンタリズム』の序言において、フランスやイギリスのみならずドイツやスペイン、またロシアやスイスなどにも、知と権力の結びついたオリエンタリズムの長い伝統のあったことに言及していたが、そこでおもに俎上に乗せられているのは、アメリカを別にすればフランスとイギリスである。このような欠落は、一人の研究者がなしうることを考えれば、それ自体では非難することではない。またオリエンタリズムの形成において英仏が特権的な役割を果たしていたことも否定できない。だがスペインには、英仏がインドや北アフリカなどにもった利害に相当するような、国民的レベルでの地政学的な関心とオリエンタリストとの緊密な結びつきがたしかに存在していたのであり、コラーレス氏の報告は、そのような意味で、西洋の「オリエンタリズム」研究の欠落部分を埋める不可欠の作業であるといえるだろう。今回の報告が貴重なものであったということの二つ目の理由は、それがカタルーニャという国民国家の下位単位に視点を定めているということにある。つまりこのような視角によって、オリエンタリズムというそもそも国境を超える著作の引用のネットワークが、国民国家の内部においていかなる力学のもとに存在していたのかを問うことができるのである。翻ってそれは、オリエンタリズムという他者表象をとおして、そうした国家の内部にはたらく権力秩序のありようを探る糸口となるに違いない。

さてこのような意義をもった今回の報告であるが、それをあえて一言で要約すれば、「反植民地的なカタルーニャの眼差し」なるものの再評価の動きにたいする異議申し立ての試み、とでもいうことができるだろう。ここで「反植民地的なカタルーニャの眼差し」というのは、スペイン国家の地政学的関心が密度濃くあらわれる北アフリカを訪問した 19 世紀後半以降のカタルーニャ人には、植民地主義に抗するような独自の視点があったという、ここ数十年の間に新たに起こった見方のことをさしている。論者によっては、「反植民地主義的」なカタルーニャ人と被植民者との「連帯」を示唆するものもいる。コラーレス氏の

考えるところでは、いわゆる反植民地的な眼差しをもっていたとされたアウロラ＝ベルトラナ、ルビオ＝イ＝トゥドゥリ、プロウス=イ=ヴィラなどの著作が1990 年代以降に陸続と再版されてきたのは、そのような利害関心にしたがってのことである。

ここで、コラーレス氏の周到な報告のなかからいくつかの主要な論点を拾い出してみよう。まずは、1840 年代から 50 年代にかけての、いわゆるカタルーニャの「レナシェンサ」、つまり過去の想起によって民族的なアイデンティティーの高揚がはかられた時代における、カタルーニャ人の北アフリカ認識についてである。その点で示唆的なのは、この時期の文芸復興が、中世後期に東地中海を舞台に活躍したアルモガバルスの武勲詩の再評価をはじめとするカタルーニャの十字軍への注目であろう。つまり民族の言語や文化の復興が、イスラム教徒と戦いつつカタルーニャ国家が形成されてきた歴史を再確認し、同時に新たに否定的なイスラム表象をうみだしていく動きと連動しているのである。一見するとカタルーニャ固有の民族文化を発見したはずのものが、「19 世紀スペイン帝国の切り離せないパートナー」となってしまったのだ。そしてそのようなカタルーニャの反イスラムの潮流はスペイン帝国の境界をこえ、オスマントルコに抗してエジプトを占領したイギリス人への共感などをとおして同時代の西洋帝国主義へと結びつけられていったのである。また氏によれば、学問としてのオリエンタリズムの流れにおいても、かれらは当時西洋諸国を席巻していた古代エジプト学の虜となっていたのだという。カタルーニャ人たちがじっさいにオリエントに出かけていくのはスペインに少々遅れをとってのことなのだが、それ以前から、彼らはレナシェント運動をとおして、また既存の旅行記や学問に触れることによって、すでに紙の上を旅していたのである。つまり独自の仕方でオリエンタリズムの引用のネットワークに参画し、膨張させていたのである。

続いてコラーレス氏の報告は、カタルーニャ人たちがエジプト、マグレブ、またとりわけモロッコを訪れ、支配者としてのヨーロッパ人に自己同一化し、これらの国々を他者化していくさまを、当時の旅行の背景となった技術革新や国際的状況、経済関係などにふれながら、また大企業家、商人、宗教家、軍人、映像作家、報道員、探検家など旅行者の範疇ごとに論じつつ検討をくわえていく。その詳細をここに紹介することができないのはまことに残念だが、いずれにせよ氏のだした結論は、彼らがことごとくヨーロッパ全体の、そしてモロッ

コと西サハラにおけるスペイン植民地事業の不可分の一部を構成しているということであった。ではそのような植民地主義のエージェントとは異なる位相にあると再評価を受けつつある先述の面々についてはどうだろうか。コラーレス氏は最後に、これらの人物が体現する「反植民地的なカタルーニャの眼差し」なるものにたいして反証していく。彼らのうちのある者は、植民地国家としてのスペインの正当性と能力については疑問を差し挟むもののヨーロッパにおける植民地事業は是認する。つまりスペインは「西洋を代表できるような純粋なヨーロッパ人種ではない」というのである。このような思考の枠組みにしたがったのだろうか、他の者は、占領者フランスにたいするアルジェリア人にたいして充分な思いやりを見せていたとは思えない。ある者は、モロッコとスペインの対立はカタルーニャとは関係がないという気持ちをぬぐいきれないし、またある者は、被植民地人のうち共感を向けるのは都市のエリートに限られていて民族主義者を含む民衆の権利要求ではない。氏の考えるところでは、彼らもまた、オリエンタリズム的な幻想や植民地主義の誘惑に抗することができなかったのであり、植民地主義自体にたいする批判をうみだすことはできなかったのである。

カタルーニャ人は全体として反植民地主義のイデオロギーを共有としてたという「異なった眼差し」論者たちにたいするコラーレス氏の反駁は圧巻である。氏の診断によれば、このようなことが起こったのは、学者たちがある一つの仮定、この場合は反植民地主義的なカタルーニャ人という仮定にそうようにしてしかテクストを読まないことにある。そしてこうしたあまい読みを引き起こしたのは、徹底的な比較史への意志が欠如していることである。

今回の報告は、ヨーロッパ全体、またスペインとの関係においてカタルーニャがどのようにオリエンタリズムに参画したか、そしてこうした事実を包み隠してしまう体質が学的世界のなかにいかに埋め込まれているのかを検証したにとどまらず、とりわけ比較史的視野に支えられた厳しいテクスト批評こそが、それを避ける唯一の道であることを教えてくれるものだ。コラーレス氏によるこれらの提言を、われわれはしかと受け止めたいものである。